

# 郷土室だより

## 埋もれた記録

1

安藤 菊二

明治百年を合言葉にして、ここ数年来、江戸・東京に関する本は、ずいぶん数多く出版されたし、このブームは当分続きそうな勢いである。名著の翻刻もしきりに行なわれるようになり、たいいていの資料は手にすることができるようになって、たいへん喜ばしい。東京の歴史は、東京っ子の私にはことさら懐しくもあり、興味深い。

図書館にいたので、新刊本はたいいてい覗いてみる事ができるので言うのだが、どの本も掘る所は決っているから、感覚がシャープだとか、読みが深いという特徴を除いたら、幹線道路の一本道、同じ話題を同じ種本で繰り返しているといった感じが強くする。

何か眼新しい資料はないものかと思う。そうして気が付いたのは、いちど雑誌に発表されただけで、一冊の本に纏められずにしまった、教多くの随筆が見落されていることであつた。

僅々五、六十年前の雑誌に発表された文章を読んで見ても、世相がこうも変わってしまったのかと驚かされることが多い。時経たものが意外に新鮮な感動を呼び起すのである。

雑誌は読み捨てにされるものと相場はきまっているから、明治・大正期の雑誌を見ることは困難だが、注意をしていれば資料は集る

もので、私の手許にもかなりの分量が集っている。

これを一冊の本に纏めるとなると、著作権の問題もあって、おいそれとは片付かぬが、今回は、著作権の消滅した明治期のもの幾篇かを扱って、読んでいただくこうと思う。

### △その1▽ 魚河岸

麴生

江戸も東京と名を替えて、魚河岸の繁昌は往古の三分の一に

も及ばずと、土地の故老は嘆じているが、それでも所謂大江戸の節を今も存しているのはこの河岸で、到る処の神社仏閣、劇場寄席には、かの「しん場魚がし」の納提灯引幕の類を見ざるはない。

で、昔時の江戸、当時の東京、いずれの人文風俗を叙述するにも必ずこの「魚河岸」なる物が引合に出る。又これを一々取調べると実に一種の趣



「東京名所鑑」より 日本橋魚市場

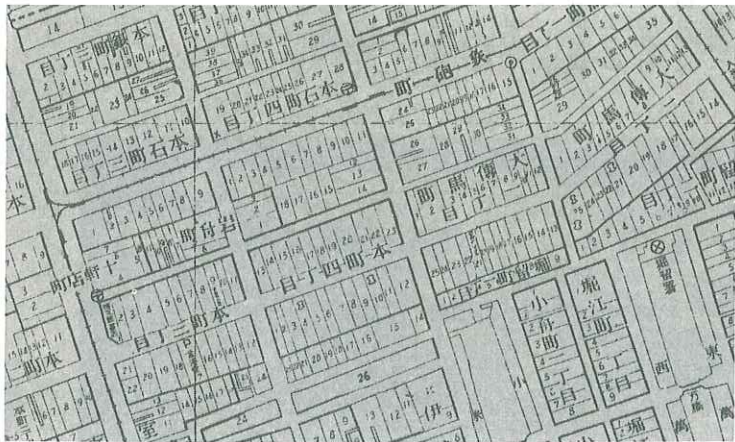
味がある。けれども、その歴史・位置・風俗・習慣・営業等の詳細については、この一題目でも優に一冊子を成す位であるから、紙数限あるこの処において、到底その十の一を尽す事も困難い。で、今ここでは単に魚河岸なるものは、どんな処で何をしているかということ、素人分解のするよう説明するに過ぎない。その段前までお断り申して置く。

魚河岸が日本橋の東北に設けられて  
 此処に魚市場の売買を開いたのは、今  
 は昔し慶長六年、即ち三百年の往古で  
 最初は摂州佃村の漁師が江戸の佃島に  
 移り、それが更に分れて、当時の日本  
 橋に移る。これに就ても家康公以来の  
 歴史伝説もあるが、そんな旧記の反古  
 穿索は一切抜にして、一足飛びに当時  
 の世界に移れば、先ず往古より魚河岸  
 と称する一帯の地は、西は室町一丁目  
 二丁目の大通り、東は伊勢町通りを限  
 って、南はいうまでもなく日本橋の河  
 岸、北は本小田原町を境界とする。そ  
 の間の町名は本船町・長浜町・安針町  
 ・本小田原町、これを更に土地の通語  
 に訳せば、河岸端の南側を「納屋前」、  
 同じく河岸通りの中央を「中店」、同じ  
 く河岸通りの北側を「芝河岸・中河岸  
 ・地曳河岸・下河岸」と唱え、地曳河  
 岸の南より本小田原町の北へ通抜けの  
 小路を「廿軒」、室町の通りから右の  
 廿軒へ抜ける小路を「高砂新道」と呼  
 ぶ。その中で彼の有名なる弁松は本船  
 町、神茂（蒲鉾屋）は本小田原町、か  
 の水神を祀る常盤稲荷は長浜町。そこ  
 で右の芝河岸その他の通語は大抵その  
 売物の種類から来たもので、芝河岸  
 の一名「上河岸」ともい、おもに芝  
 浜から大森羽田辺の魚類の集る所、地  
 曳河岸は房総近海で地曳網を用いて獲

たる魚類の寄る所。下河岸は川魚類を  
 商う所で、中河岸はまず無所属である  
 から、芝と地曳の両方を扱うという姿。  
 さて又これを商う各問屋の中にも大物  
 師・小物師・下物師・塩物問屋の四種  
 あつて、大物師というのは、俗に「庖  
 丁物」と称する大物即ち鮪・鮫・鰹の  
 類を扱うので、小物師とは大物の反対  
 で、鯛・すずき・こち・かれいの如き  
 比較的小さい魚を扱う店をいう。  
 下物師とはかの「小物」と称する鰯  
 ・このしる等の小魚を商うので、塩物  
 問屋は説で字の如く塩物を売る。ただ  
 し、この塩物には二種あつて、地廻り  
 の枯物を売る店を普通の塩物問屋と呼  
 び、鱒・鮭・鮪・数の子類を商う店は  
 秋味問屋と呼ぶ。  
 魚市は午前午後の二度に開かれて、  
 午前は朝市、午後は夕市又は夕河岸と  
 いう。春夏秋冬に依て時間に多少の差  
 はあるが、まず晴天の三時から四時頃  
 までには大森羽田辺の魚類が馬車に  
 積れて来る。それから漸次に諸方の魚  
 荷が寄つて、五時頃から売買が開始ま  
 る。各料理店の雇人又は小売の魚商が  
 八方から買出しに来る。その最も出盛  
 る六時頃には日本橋の袂に眼隠しの癖  
 を立てて余人の往来を止める。サアそ  
 の間の混雑は火事場とも戦場とも譬え  
 ん方なき光景で、魚は宙を飛ぶ。人は

声からす。押す。突倒す。怒鳴る。  
 喚く。実に商売だか喧嘩だか殆どその  
 區別に苦む位だが、それが三百年来の  
 習慣となつて、その混雑の中でも曾て  
 一厘一毛の間違を来した事がないとい  
 うも不思議。かくして僅々二、三時間の  
 間に、東京百八十余万人の口の上るべ  
 き大小魚類が甲から乙へと行渡つて、

的。右の如くで、魚河岸は元目を除く  
 の外は一日も休業無く鳥の啼かぬ日は  
 あるともこの魚河岸に休業は無いと、  
 土地の者は誇つている。  
 もちろん無闇に休まれては大変であろ  
 う。  
 問屋の他に仲買あり、又その他に「  
 棒手茶屋」というものあり、棒手茶屋

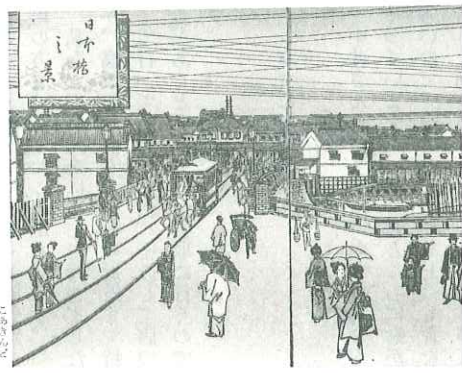


明治四四年日本橋地区地図より「魚河岸附近」

流石は東京、いかなる  
 場末にも生魚の顔を見  
 ぬ日はないという次第  
 で、午前九時を過ぎる  
 と、右の騒動も全く鎮  
 して、所謂の大風の吹  
 いた跡。流石の修羅場  
 も蕭寂閑たる光景、但  
 し暑中には午後二時頃  
 から五時頃までの間、  
 かの夕河岸を開くを習  
 慣とするが、これは中  
 店又は納屋前の一部に  
 止つて、午前の十分の  
 一にも及ばない位。随  
 って記すほどの事もな  
 いが、夕河岸の果てた  
 頃になると、目黒品川  
 近在の農夫が肥桶を担  
 いで数千人押寄せる。  
 これは魚の骨や腸を拾  
 い集めて肥料にする目

は多く横町又は新道にあるが、これは魚類を売買するのではなく、単に「棒手振」と称する小売の魚商の買物を預るので、店先にはいずれも大きな生洲を構えてある。で、まず小売の魚屋が甲の店で鯛二枚を買えば、これを棒手茶屋の生洲へ投込んで、更に乙の店へ行って鯛又は比良魚三枚を買う。同じくこれを茶屋の生洲へ投込で、又もや丙の店へ行くという風で、最後に旧の茶屋へ引返して自分の魚を集めて行く。これが一人ならば知らず、一軒の店で同時に五人十人の魚を同じ生洲に預って置くのだから、その区別甚だ曖昧な訳であるが、そこは商売、誰の鯛は目下何尺、誰の鯛は鱈に疵があるという事まで、一目に判断と睨んだが最期、いかなる混雑の際にも、けっして間違えぬというのが棒手茶屋の特色、何と面白いではないか。

河岸の風俗習慣などについても、いふべきことたくさんあるが、まず第一に記すべきは正月の初売で、二日の午前一時から開くを例とするが、この日には年々集る者平均五・六万人、各町内には高張提灯を立て、各問屋の軒には長提灯をかけ、元日の夜から準備を整えて客を待つ。客の方でもまた、いやしくも河岸へ買出しに来るほどの者は、この日にはかならず顔出しをなす



当時の日本橋「東京名所図解」より

につき手拭一筋を贈る。またその混雑の中に、かの一文獅子という獅子舞が、四方八方から入りこんで、どこかの店でもかまわず踊りこむ。はなはだしきは裏口から座敷へ舞いこむ。じつに乱暴狼籍の次第だが、土地では吉例として怪まず、一々に包金を呉れて追返す。この朝の混雑というものは実にたいへんで、たいていの者は気が遠くなるというくらい。

酒問屋のあったのは新川、茅場町、新堀とこの三場所です。以前は二十五、六軒あったが、今は十二、三くらいのものでしょう。鹿島清兵衛というのが一番大きい店でしたが、今は商売をや

附記 1 「文芸界」第三卷第二号（明治三十七年一月）「東京風俗」特集号による。

- 2 筆者、麴生は何人の変名か詳かでない。
- 3 仮名遣は現代仮名遣に、また、斯・其・彼などの宛字はこれを変名に改めた。

△その2▽ 大川端あれこれ

荒井芳太郎爺談

私は安政四年の生れです。例の大地震が二年ですから、それから二年たって生れたわけです。生れたのは永代の側の川端で、今では町名が変わって新川一丁目・二丁目になっていますが、霊岸橋を渡ると四百戸ばかりの町がある。南新堀一丁目、二丁目、富嶋町、浜町、四日市町、塩町、大川端、もとはこれだけあったのです。

沖から酒が来ますと、小さい舟でそれを両方へ取分け、店へ持って行ってころがし上げるのです。酒は皆上方から来るので、新酒ができると、それを船に積んで、並んで帆で走って来る。その一番先に東京へ乗込んだのを、新酒の一番といえます。その船の者が陸へ来て、赤い襦袢を着て踊っているうちに、船はカラになる。この一番の酒は、あとから上っても先へ積むことになっていました。

酒問屋

新たに着いたお酒は、お燗して飲むんじゃない。冷でやって値をきめるのです。値がきまってしまうと、お燗してお客にご馳走しますがね。最初は茶碗で利いて、塩梅を見るだけです。船が着くと大きな杭に轆を結えつけて、船頭だけ問屋へ上る。若い衆は泊

りつけの宿がありました。

沖へ来るのは大きな船です。三十六反の帆ですから桁が太い。柱を立てつきりで、綱が四本ついている。屋形といて屋根ができているんですが、その両方に綱が二本ずつ渡るわけです。中のろくろに樫の木の棒を挿して、それにつかまって、えんやえんやといって帆を巻きます。そういう船が、百駄——二百本からの酒を積んで、幾杯も入って来る。船にはいちいち名があつて、舳のところに、角福とか劍酔ととか山ととかいう風に、いろいろな印がついています。上には苦で屋根が葺いてあるし、両側も垣根のようにして、雨が来ても濡れないようにしてあります。

船頭稼業

私が新川で働いたのは二十二、三の時からです。ほんとうの親仁は山田仙之助といて、大川端に古くいた家ですが、なにしろ子供がしっかりあったものだから、荒井という家で一人うちへくれないかという。それで貰われたのです。河岸っ端で、船商売の家が並んでいるし、子供の時から船が好きでしたが、ほんとうに仕事をはじめたのは二十二、三からです。(中略)

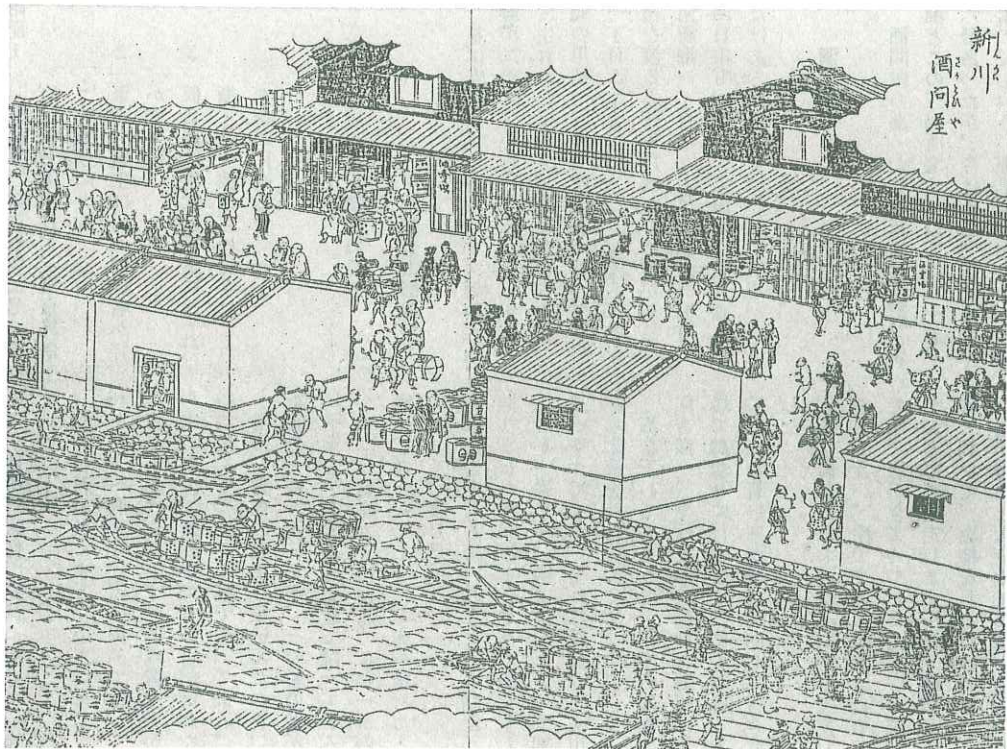
陸と川とは道が違います。たとえば日本橋の方から来るには右側を通る。神田川でも右側を通って行く。どんな横川でも右の方ばかりですから、棹を肩に当てるのはいつも左です。だから始終棹を当てていたところは、どうもしたわけではないが、今でも肉が固くなっています。船というやつは、汐時で行くんだから、夜中でも出かけなければならぬ。……

私は店の仕事をしたので、船も漕げばいろんなことをやりました。店には暖簾も何もありません。年の暮になると酒の船が永代へしこたま来る。酒屋の倉だけじゃとても入りきれないから深川の米倉を借りてそこへ詰める。木場の方まで借りたことがあります。

私なども始終舟に積んで行きましたが、高橋から向う、扇橋の近所まで持って行って詰めました。そうして店の倉があくとまたそれを引取に行くのです。

ぶっこわれ倉

中井さんという家は、今でも大きくやっていますが、自分のところに倉が無いので、一場所六つも七つも倉を借りて酒を詰める。そいつが皆ぶっこわれ倉だから、この酒を泥坊に行くや



「江戸名所図会」より 新川酒問屋

つがあるのです。何人が組んで行って、一人先へ入って、桶を持って行って酒を盗みます。締りが嚴重でないから、そんなことができるので、いよいよ引取に行ってみると、半樽ができたり、カラが出たりしたものです。

新川は両側がずっと酒屋でした。新川・茅場町・新堀の三箇所の中では、一番店が多かったでしょう。酒は九分まで上方です。今は陸で来るから、昔のような倉はいらないのです。

### きたな床・寄席

私は二十才くらいまで髭を結っていました。近所に「きたな床」という髪結床があって、三日も居ると職人が替ってしまふので、オッカアが出てバリバリやっている。爺さんが話好きだったが、実際穢い家で、「おい、水がきたねえじゃないか」なんていおうものなら、「そんなら汲んで来てくれ」くらいいうやつだった。結ってしまつてから、髭のどこをいつまでもたたいていたことをおぼえています。

新川の近くには寄席も講釈場もありました。霊岸橋を渡ると「川端」という寄席があつてよく行きましたが、どうもあまりいい客が来ない。塩舟の船頭が幅を利かしていました。浜町の狭

い裏に、喜多川という講釈場もありました。品川へ船が入ると、船の者がやってくるので、すぐ野天博突がはじまる。商人がそれをよく知っていて、汁粉屋だの、いろんなものが来した。船はそう途切れずに来ますが、一番多いのは暮だったようです。

### お祭

お祭は盛んでしたよ。こちら河岸も八幡様の氏子です。うちの方の神輿は白木で三尺くらいしかないのですが、船で囃子を取りに行つて、持つて来てまた囃子を持って行く。ヤワな倉に入れて置いたものだから、八幡様の神輿三体と一緒にいつかの地震で燃えてしまった。深川の神輿は平屋の神輿の小屋が出来ていたのですが、身体には換えられないから、誰も出しに行かなかったのです。

深川で一番大きな神輿は深浜のでしょう。彼処は漁師だの肴屋だのという連中が多いので、それを此方河岸へ担いで来る。よく担いだというので、みやげに酒カタマ(注)片馬酒・醬油・油の二瓶斗樽一つ、醬油・油は八升樽四つ。を持たしてやったものです。担いで来ても、此方の者が手だしをしちゃいけない。この神輿を洲崎の遊女屋へ担ぎこむので、根津から引

越した五十年祭の時などもなかなか盛んでした。なんといつても、神輿祭りや八幡様でしょうね。

大川端の神輿は船の者だから乱暴だというので、皆寄りつかなかった。この神輿のあとは二町くらい途切れて来ました。いくら乱暴しても、船へ行かれるとそれっきりだから、どうもならなかった。深川にも乱暴者が多かったけれども、大川端のにや恐れていたようです。

永代が立派にならぬ前は、大川端が宮元になっていました。舳のある船を七杯出して、くじ引で一番・二番・三番と定める。一番は八幡様、二番が大神宮様、三番が春日様で、あとは神や神主や何かを載つけて行くのです。その上るところには、ヒラタという舟を借りて来て、それを据えて笹を四本立てて砂が撒いてある。そこから上げました。すっかり廻つてしまうと、佐賀町へ送って行くのです。

その宮元になっていたのが、大川端の者は揃いを拵えてもなんでも、宮元という染抜をやりました。だから離れていてもすぐわかるのです。縮緬の揃いに皆で水をかける。誰それはまだ水がかからないから捜せ捜せ、というので、しまいまでには残らず水をかけられてしまう。今でもうちの方の神輿は

白木だから水をかけます。先触（だぶ）が水を出して置きなというくらいです。……

### 刺青（いれずみ）

私の刺青は両腕が雄蛇・雌蛇、脊中が虎を撲殺するところ、腹のは風の神と雷様が酒盛をしているところです。五十幾つで彫り足したせいとか、眼へ来たようで、身体は丈夫だけれども眼だけがいけない。黒いのは針十分くらいでつくのですが、入れた時は墨の色で癒るに従って青くなる。墨を入れた当座は膨れ上って、六日、七日たなれば平になりません。朱は殊に痛い。……妙なもので、刺青があると、どこのお祭へ行っても、お巡りさんが着物を着るといわない。深川の高橋の側に神明様というのがあつて、そこのお祭に二三度行きましたが、神明様の日には雨が多いので、きつと雨になる。

雨の中で裸で歩いても別にかぜもひきません。

(話はまだ続くのですが、これで)

(昭和十三年刊『江戸読本』第二巻十号から)

埋もれた記録は、昭和49年6月・50年9月に、芹内報「ちゅうおう」に発表されたもの。

明治時代 店名  
 人名 検索可能資料 その 2

【明治20年代】

京橋図書館蔵

## 【明治20年代】

(明治20年)

全国所得納税者姓名録 東京府の部 [K283—セ]

日本橋区, 京橋区, 各町別番地順 通計2181人

(明治21年)

東京著名録 宮川久治郎編 [K283—ト]

業種別, 目次, いろは索引あり

(明治22年)

明治初期の在留外人人名録 寺岡寿一編 (昭53)

『The Tokyo and Yokohama Directory 1889』

(P255～) [K283—メ]

東京・横浜のみ, 居留外人の住所, 氏名,  
A B C 順, 原つづりと日本語

(明治22年)

東京横浜銀行会社役員及商館商店人名録

高橋桂三郎著 [K283—ト]

東京府下と横浜の銀行諸会社職員録 (築地居留  
地の部あり)・業種別商人録・横浜居留地外国  
人商館録。

(明治23年)

東京買物独案内 上原東一郎編 [K672—ツ]

いろは順, 業種ごと, 題字引目録あり

(明治23年)

新編東京独案内 [K B05—30]

東京横浜独案内 [K B05—31]

業種別有名店

(明治23年)

東京百事便 永井良知編 [K B05—ト]

業種別全般, 会社 (創業, 役員) 目次あり

(明治23年)

東京名家独案内 岡村清吉編 [K283—ト]

職業, 業種別目次あり

(明治24年)

帝国実業家立志編 (抄) 梅原忠蔵編 [K284—テ]

商業家, 工業家, 農業家, 各業種別, 生立より  
事歴

(明治25年)

東京現住著作家案内 桜井徳太郎編 [K283—ト]

当時在京の小説家, 翻訳家, 狂言作者等諸家の  
雅号を五十音順に配列, 氏名, 住所, 著作 (発  
行所)

(明治25年)

実業家百傑伝 一, 二 [K284—ツ—1~2]

坪谷善四郎編

頭取, 議員社長等実業家の功業事蹟, 肖像画あ  
り 一巻45人, 二巻55人。目次あり

(明治26年)

新撰東京案内鑑 (抄) [K B05—ト]

小島猪三郎編

題目別, 説明あり

(明治27年)

東京案内 一名遊歩の友 [K B05—ト]

長谷川園吉編

名所案内等 図版多

(明治27年)

東京諸営業員録 一, 二, 三 [K6703—ト—1~3]

賀集三平編, 渡辺清太郎補編

業種別全般, 屋号, 営業者名, 営業所 (住所と  
位置) 外国公使館所在, 根拠索引, 川及堀之位  
置

(明治27年)

日本諸会社登録録 佐藤長四郎編 [K6703—ニ]

東京, 神奈川, 業種別

営業所, 会社の種類及本店